

SHOW HEY シネマルーム

★★★★

シビル・ウォー アメリカ最後の日

2024年/アメリカ・イギリス映画

配給：ハピネットファントム・スタジオ/109分

2024 (令和6) 年 10 月 8 日鑑賞

T・ジョイ梅田



2024-71

監督・脚本：アレックス・ガーランド

出演：キルステン・ダンスト/ワグネル・モウラ/スティーヴン・マッキンリー・ヘンダーソン/ケイリー・スピーニー

👁️👁️ みどころ

ハリス（民主党）VS トランプ（共和党）が激突する米国大統領選挙まであと1か月となった今、タイムリーに本作が公開！「CIVIL WAR」ってナニ？「アメリカ最後の日」ってナニ？

対立と分断が続いた近未来の米国では内戦が頻発し、連邦政府から離脱した19の州は、テキサスとカリフォルニア同盟からなる西部勢力が、大統領率いる政府軍と激しい武力衝突を！冒頭、「我々は歴史的勝利に近づいている」と訴える大統領の姿がTV上に映るが、どうやら彼は3期目らしい。ええっ、米国でそんなことがあり得るの？合衆国憲法では大統領の任期は4年、2期までと定められているはずだが・・・。

こりゃ面白そう！こりゃ必見！常に「名作映画100選」のトップに挙げられる『風と共に去りぬ』（39年）では、南北戦争（1861～65年）が大きなテーマだったが、本作はそれに並ぶ問題提起作になり、名作になるのでは？

そう期待したが、脚本を書いたアレックス・ガーランド監督は、主役を戦場カメラマンや記者にしたのは、一体なぜ？また、本作をロードムービーにしたのはなぜ？その是非は？その結果、状況設定はすばらしいものの、出来はマイチ。それが、私の本作への全体評価になることに・・・。

— * — * — * — * — * — * — * — * — * — *

■□■ CIVIL WAR とは？こりゃタイムリー！こりゃ必見！ ■□■

本作の邦題は、『シビル・ウォー』というメインタイトルに、「アメリカ最後の日」というサブタイトルをつけたもの。しかし、本作の原題は『CIVIL WAR』（だけ）だ。英語の初心者には「CIVIL WAR」を“市民戦争”と訳すかもしれないが、それは間違いで、「CIVIL WAR」とは「内戦」のことらしい。

しかし、「The CIVIL WAR」になると、それは、「タラのテーマ」で有名な名作中の名作『風と共に去りぬ』(39年)で描かれた、アメリカ最大の悲劇である「南北戦争」(1861～65年)を意味するらしい。すると、原題を『CIVIL WAR』とする本作は、どこかの国の内戦をテーマとした映画？それともアメリカの南北戦争を描いた映画？「CIVIL WAR」だけでは、それがわからないため、邦題には、「アメリカ最後の日」というサブタイトルをつけたわけだが、そうすると、余計、本作は何の映画かわからなくなってしまうことに…。

ダニー・ボイル監督の『28日後… (28DAYS LATER)』(02年)、『シネマ3』236頁)の脚本家としてデビューし、その続編である『28 週後…』(07年)、『シネマ18』364頁)では製作総指揮も務め、『エクス・マキナ』(15年)、『シネマ38』189頁)で監督デビューしたアレックス・ガーランドはアメリカ人ではなく、1970年生まれのイギリス人だ。そんな彼が、なぜ「CIVIL WAR」をメインタイトルとし、「アメリカ最後の日」をサブタイトルとする本作の脚本を書き、監督したの？

本作の日本公開は、2024年10月24日。時あたかも、トランプ(共和党)VSハリス(民主党)が激突しているアメリカの大統領選挙の1か月前だ。ひょっとして、本作のサブタイトルはそれと関係があるの？

■□■近未来の米国の大統領は3期目？彼は共和党？民主党？■□■

2024年11月に投票票を迎えるアメリカ合衆国の大統領選挙の対立軸は、大きくは「大きな政府」(民主党)VS「小さな政府」(共和党)だが、ハリスVSトランプが激突する現情勢では、①雇用問題、②移民問題、③人工妊娠中絶問題、等々、論点は多岐にわたっている。それはそれで仕方ないことだが、バイデンとトランプが激突した2020年11月の大統領選挙では、投票票の不正問題という、民主主義国家ではおおよそありえないような問題点が発生したばかりか、敗北したトランプ陣営支持者による連邦議会への突入事件まで発生した。

しかし、アメリカ合衆国には、アメリカが誇る合衆国憲法があり、そこでは大統領の任期は4年、2期までと定められている。2024年の今、ロシアではプーチン大統領が、中国では習近平国家主席が、両者とも憲法の定めを無視して(無理やり変更して)任期の延長を実現したため、先進民主主義国家はこぞってこれを批判してきた。ところが、本作冒頭のアメリカ合衆国大統領(ニック・オフアーマン)の演説を聞いていると、どうやら彼は3期目らしい。しかし、アメリカ合衆国はいつ憲法を改正したの？また、長い間、二大政党制が定着してきたアメリカ合衆国において、3期目らしいこの大統領は共和党の大統領？それとも民主党の大統領？それとも…？

■□■なぜ主人公を戦場カメラマンと記者に？その是非は？■□■

常に名作100選のベスト1に挙がる映画が、「南北戦争」の中でたくましく成長していくヒロイン、スカーレット・オハラを主人公とした『風と共に去りぬ』だが、彼女の身分は南部の名家のお嬢様だった。それに対して、分断の果てに内戦が勃発した近未来のアメリカ

カを舞台とした本作の主人公は、現在ニューヨークに滞在中の戦場カメラマンの女性リー・スミス（キルステン・ダンスト）と記者のジョエル（ワグネル・モウラ）の2人だ。西部勢力のリーダーは誰？その軍隊の司令官は誰？前述のような大胆な設定をした本作の主人公が、なぜ政治家や軍人ではなく、戦場カメラマンと記者なの？その設定の是非は？戦場カメラマンや記者の役割の重要性は、私なりに認識しているつもりだが、『シビル・ウォー アメリカ最後の日』と題された本作で、政府軍と西部勢力はどこで激突したの？日本では関ヶ原の戦い（1600年）が、“天下分け目の合戦”と言われているが、政府軍と19の州を結集した西部勢力との“天下分け目の合戦”は、いつ、どこで、どのように展開されたの？私の大きな興味はそこにあったが、本作では残念ながら・・・。

TV画面に映る「我々は歴史的勝利に近づいている」と語る冒頭の大統領の演説風景を見ていると、彼の発言は強気一辺倒だが、どうも実情は彼の主張とは裏腹に、西部勢力がワシントンD.C.の近くまで進攻し、政府軍は敗色濃厚になっているらしい。したがって、冒頭のTV演説に続くシークエンスは、ニューヨークに滞在中のリーとジョエルが、ワシントンD.C.の陥落を前に、14か月間、一度も記者の取材を受けていない大統領への単独取材を敢行しようとする姿だが、そんなことが可能なの？ニューヨークからワシントンD.C.までの距離は車で1,379 km。リーの恩師であるベテラン記者サミー（スティーヴン・マッキンリー・ヘンダーソン）と若手カメラマンのジェシー・カレン（ケイリー・スピーニー）がシャーロットビルまで同乗することになる導入部のストーリーは、それなりに興味深い。いささか私の期待とはズレている。そんな導入部のストーリー展開では、「3期目の任期中に後悔したことは？」、「FBIを解散させたのは賢明な判断でしたか？」、「米国民への空爆はどのように考えていますか？」等々のいかにも記者らしい大統領への質問事項が語られていくが、戦局が大きく混乱している中、事前連絡もなしに大統領へのそんなインタビューが可能なの？アレックス・ガーランド監督が書いた本作の脚本は、私にはいささか無理筋のように思えたが・・・。

■□■なぜロードムービーに？なぜジェシーの成長物語に？■□■

山田洋次監督が、“天下の健さん”こと高倉健と長髪姿が似合う(?)若き日の武田鉄矢のあつと驚く共演を実現させた『幸福の黄色いハンカチ』(77年)は、もう一人、異色女優、桃井かおりの起用もあって、すばらしいロードムービーになっていた。しかし、『シビル・ウォー アメリカ最後の日』と題された本作は、本来「ロードムービー」ではなく、近未来を舞台とした歴史大作として、そしてまた、アメリカ大統領選挙を控える今、投票権を持つすべての米国民に対する大きな社会問題提起作として製作されるべき企画だと私は思っていた。

ところが、本作は、リーとジョエルにサミーとジェシーを加えた4人による、ニューヨークからワシントンD.C.までのロードムービーとして構成されたうえ、中盤のストーリーは道中での数々の出来事を観客に見せていく中でのジェシーの成長物語になっているから、

アレレ、アレレ……。さらに、南北戦争は「関ヶ原の戦い」と同じような事実上の決戦となった「ゲティスバーグの戦い」があったが、本作に見る「連邦政府軍 VS 西部勢力」の「シビル・ウォー」の勝敗は既に決しており、西部勢力がワシントン D.C.に進攻する中、独裁的な大統領が降伏するか否かという局面に至っているらしい。つまり、今は、ワシントン D.C.までの200kmの地点であるフロリダのシャーロットツビルに西部勢力の軍事基地が築かれており、あとは連邦議会やホワイトハウスを制圧して大統領の身柄を確保し、勝利宣言をするだけという状況だ。

したがって、本作のクライマックスは連邦議会やホワイトハウスへの突入を目指す西部勢力の正規軍の後ろに、戦場カメラマンや記者として、リー、ジョエルとジェシーが“金魚のふん”のように(?)くつつき、写真を撮りまくるというシークエンスになる。ちなみに、その場にサミーがいないのは、ロードムービーの途中で、“ある事件”に出くわした際、瀕死の状況に置かれたリー、ジョエルやジェシーを救い出すべく、機転を利かしたベテラン記者らしい判断で、一人で車に残ったサミーが、追っ手の追及の中で不幸にも命を落としてしまったためだ。本作のクライマックスを観ていて私がサッパリわからないのは、西部勢力によるホワイトハウス制圧という最後の重大な軍事作戦に、なぜリー、ジョエルやジェシーたち(だけ)が参加できているの?ということだ。さらに、私がアレレと思ったのは、そんな危険極まりない突入作戦の後方に加わるリー、ジョエルやジェシーが、銃を持っていないうえ、ヘルメットも被っていないことだ。もちろん、映画だから、主人公に敵の弾が当たらないことは暗黙の了解(?)だが、それにしても、本作のクライマックスでのこのような描写は如何なもの?なお、ジェシーの成長物語、しかも尊敬すべきベテラン戦場カメラマン、リーを主役とした本作で、それを乗り越えていく成長物語とするために、アレックス・ガーランド監督が書いた脚本は、それなりの“収まり”を見せているが、私にはそんな“納め方”もイマイチだ。私は大統領選挙の1か月前に公開された『シビル・ウォー アメリカ最後の日』と題された本作に、『風と共に去りぬ』並みの出来を期待したが、残念ながら……。

2024 (令和6) 年10月9日記